山口県史だより

第32号／平成27年11月

特集　碑に刻まれた「平和」への祈り

「動員学徒戦没之碑」（熊毛南高等学校／平生町）
　空襲の日から７０年目となる平成27年８月14日のようす

山口県立熊毛南高等学校提供

特集

碑に刻まれた「平和」への祈り

今年は、戦後七〇年の節目の年です。「平和」を願う様々な行事が行われ、テレビやラジオなどでも戦争に関連する多くのテーマが取り上げられるなど、「平和」について、深く考えさせられる機会となりました。今回の特集では、県内の学校に建立された慰霊碑を取り上げ、平和への願いを後世に伝えることの大切さを思い起こしてみたいと思います。

■ 昭和二十年八月十四日の悲劇

第二次世界大戦の、終戦のまさに前日に当たる昭和二十年（一九四五）八月十四日、岩国と光の二つの地域は、それぞれ別の米軍B29編隊の空襲を受け、大きな被害に見舞われました。光では、海軍工廠が標的となり、県内の学校から動員された学徒や挺身隊の人たちもその犠牲となりました。

『光市史』（一九七五）は、同日午前十時頃、先に空襲を受けた岩国の被害（死者五一七名、負傷者八五九名、行方不明者一三〇名）について触れ、続いて「そのうちに敵機は退散（岩国から）を開始し、光地方の警報も二時間ばかりで解除となった。ちょうど昼食時のことであり、工廠では動員学徒をはじめ、従業員一同がほっとした思いで廠内に帰り、箸をとったばかりのところであった。突然B29の編隊が姿を現し、工廠の諸施設めがけて爆弾投下を開始した。延べ約百五十機の五回にわたる波状攻撃で工廠は壊滅的損害をうけ、…」と、避けがたい不運が重なったことや、凄惨な攻撃の様子を記しています。

犠牲者は七三八名とされ、その内訳は、『回想の譜　光海軍工廠』（一九八四、光廠会編）によると、軍人五一名、軍属五五四名、学徒一三三名（男子四八名、女子八五名）とされています。

『山口県立熊毛南高等学校百年史』（二〇〇二）は、終戦直後の昭和二十年九月二日、県知事、遺族、学校関係者らの参列で行われた学校葬の様子を伝えています。「『終戦がもう一日早かったら』と誰もが無念さをかみしめた。」と、不運を歎く言葉には、本当にやるせない気持ちにさせられます。

■ 慰霊碑の建立

戦後になると、犠牲となった方々を供養するため、追悼式や慰霊祭が行われ、また、関係者の努力によって、慰霊碑の建立も進められてきました。そのうち、昭和二十年八月十四日の光海軍工廠空襲被害動員学徒を悼んで建てられた慰霊碑として、現時点で確認できるものは下表のとおりです。表中の所在地（学校）名は現在のものであり、慰霊碑建立時の学校名とは異なるものもあります。

光海軍工廠での空襲犠牲者となった動員学徒らを悼んで建立された慰霊碑

	分類	慰霊碑の名称	所在地（学校）	当時の学校名	犠牲者数			建立年月日
					8月14日の空襲被害による		その他	
					女	男		
1	高等女学校等・旧制中学校	動員学徒戦没之碑	熊毛南高等学校	熊毛高等女学校	22			昭和33年11月22日
2		乙女椿の碑	防府高等学校	防府高等女学校	8			昭和41年12月 4日
3		殉国諸嬢顕彰之碑	誠英高等学校	三田尻高等女学校	8			昭和42年 5月22日
4		純真の碑	中村女子高等学校	中村高等女学校	33			昭和43年12月 3日
5		光潮碑	光高等学校	光中学校		3		昭和44年 8月17日
6		殉難の碑	柳井学園高等学校	柳井女子商業専修学校	(2)		(4)	昭和44年10月
7		動員学徒犠牲者の碑	山口高等学校	山口中学校		16	2	昭和47年 8月12日
8		紅	柳井高等学校	柳井中学校		4	2	昭和47年12月 3日
				柳井高等女学校	12			
9		大津中健児之碑	大津緑洋高等学校	大津中学校		3		昭和62年 8月14日
10	国民学校	学徒之碑	上関小学校	上関国民学校		8		不明
11		慰霊碑	祝島東浜海岸	祝島国民学校		8	12	不明
12		悠久	光井小学校	光井国民学校		6		昭和48年 8月14日

各学校資料・自治体史等を参考に作成。（　）内の数字は『柳井市史』から推定。建立年月日は、除幕式・碑文の日付等による。

「國が戦に
苦しみを　極めし日
純く雄々しき　心もて
起ちてゆきたる　處女らよ
再び語らざる」

「動員学徒戦没之碑」より
（熊毛南高等学校）

各高等学校に残る慰霊碑は、創立記念事業の一環として建立されたものが多く、その端緒となったのが熊毛南高等学校です。昭和三十三年の創立六十周年記念事業の際、「動員学徒戦没之碑」が建てられました。

前掲『百年史』によると、碑には、終戦当時の校長であった岡島正平さんの言葉が、建立当時同校の教諭であった藤原勝さんの書により刻まれています。藤原さんは、愛娘を失われた御遺族の一人でもあり、悲しみを綴った手記も残されています。揮毫に臨まれる胸中はいかばかりのものであったかと思わずにはいられません。

■ 昭和四十年代以降の慰霊碑

空襲から十五年の節目となる昭和三十五年には、光市によって、工廠殉難者七三八名と、人間魚雷「回天」特別攻撃隊員の犠牲を追悼する慰霊碑が建てられました。一方、熊毛南高校を除く県内の高校では、昭和四十年代以降に、慰霊碑の建立が進められていきます。

三田尻女子高等学校（現・誠英高等学校）で、当時、「殉国諸嬢顕彰之碑」建立計画を進めていた中野貞介校長は、昭和四十一年九月十九日付けの『防長新聞』に、「わずか十六、七才の少女たちが〝お国のために…〟の一念からけなげに校門を出て行った時の姿は忘れることができない。その中の八人が爆弾の直撃や破片を受けて痛ましい姿になろうとは…。八人の清らかな少女たちはいまでも私の胸の中に生きている。重苦しい追憶の糸をくりながら、清純なまま散っていったこの殉国の花を顕彰し深い追悼の意をささげるため顕彰碑の建立を計画した。」と、その思いを述べています。

また、昭和六十二年には、大津高等学校（現・大津緑洋高等学校）に、「大津中健児之碑」が建てられます。光廠会の会報である『平和の光』第六号（一九八八）では、このことが大きく取り上げられ、会報を通じて他の学校での慰霊碑建立の様子を知った有志が発起人となり、実現に至ったことを伝えています。

「殉国諸嬢顕彰之碑」（誠英高等学校／防府市）
題字の八文字は佐藤栄作総理大臣（当時）が揮毫

■「平和」への願いをつなぐ

今回、この特集に取り組むことで、私たちの身近な場所にも、多くの慰霊碑が残されていることに、あらためて気付かされました。石碑は、長い年月を越えて、遠い未来にもメッセージを伝えることのできる最強の媒体と言えます。そのことを思い知らされたのは、東日本大震災による津波被害の検証の中で、数百年前の石碑や、受け継がれてきた伝承が、私たち子孫が難から逃れることを願うメッセージとして、注目されたことでした。慰霊碑は、亡くなられた方々を追悼するとともに、二度と戦争の悲劇を繰り返してはならないと、平和を願う思いを、後世につないでいくためのメッセンジャーとして、大切な役割を担っています。

戦後七〇年目の節目に、慰霊碑を訪ね、今一度、平和な時代に生きていることに感謝し、平和な社会を維持することの大切さを考えてみたいと思います。

（津枝）

「大津中健児之碑」（大津緑洋高等学校大津校舎／長門市）

近世部会

萩藩の諸職・諸制度の成立はいつ？

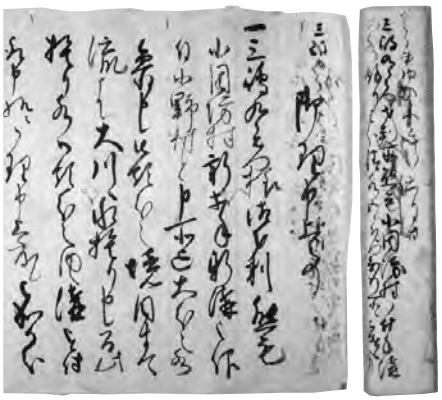
各藩の役所や役職をはじめとした様々な制度は、近世中後期のあり方から解説されることが多く、その成立や初期の実態については必ずしも明らかにされているわけではありません。

萩藩の場合も例外ではありませんが、既刊『史料編　近世２』の解説では、加判役や諸職の一部について、その成り立ちに触れています。関ヶ原戦後、防長両国に減封となった毛利氏は、対幕府関係に神経を使いつつ、試行錯誤しながら藩の体制を築き上げていきました。

例えば、行政区画である宰判制度は、当初は所務代（代官）個人の請負的な要素が強く、宰判名は「何某宰判」と所務代の名前を付した呼び方をされ、後の宰判よりも狭い領域を管轄していました。その職務を任せた家臣個人の力量に藩（毛利氏）も期待していたようです。その後、年月を重ね、次第に法制の整備や先例の蓄積が進み、人材育成の機能も内包して、それぞれの宰判が組織として機能するようになっていったとみられます。

近世前期は史料の制約があり、そのため詳しいことがわからない場合が多く、少しずつ研究を進めていくしかありません。編さん事業終了後もこのような課題は残ります。

（担当　河本・宮崎・小田）



「立野庄屋六郎右衛門・畔頭久左衛門連署御理申上事」の端裏書（右）と冒頭部分
（毛利家文庫　遠用物近世前期301、山口県文書館蔵）

承応３年（1654）６月３日の願書で、冒頭に「三嶋九郎右衛門様御才判」とある。

寄組清水氏の給領立野村の庄屋・畔頭が、熊毛郡小周防村での新井手・新溝設置の結果として生じた「捨り水」の利用を願い出たもの。

『史料編　近世２』法制245として掲載。

明治維新部会

遺跡調査に記された街角再発見の視点

「ここには何もないからねえ」――地域を訪ね歩くと、地元の方々のこうした言葉をよく耳にします。しかし、本当でしょうか。

平成八年（一九九六）に県内各市町村の協力を得て実施した幕末維新関連遺跡調査によると、計五六三か所もの関連遺跡が報告されています。それによると、ガイドブックで紹介されるような名所旧跡を持つ観光地ばかりでなく、県下のあらゆる地域に幕末維新関連の遺跡があることがわかります。

例えば、田万川町江崎（現・萩市）からは、伊能忠敬の部下が宿泊したと伝えられる廻船問屋跡が、また玖珂町阿山（現・岩国市）からは、吉田松陰が通過したと考えられる街道筋が報告されています。文化財登録件数の多い少ないではなく、地域の魅力を再発見し、大切に語り伝えようという意識こそが大切なのです。

あなたの生活圏を手始めに、県下の幕末維新期の足跡を探してみませんか。明治維新という壮大な社会変革は、県下のあらゆる地域で、様々な階層の人々によって支えられていたのだということを改めて思い起こしてみましょう。

（担当　北林・渡部・村里）

旧廻船問屋大中屋（萩市田万川地域）

旧山陽道の町並み（岩国市玖珂町）

近代部会

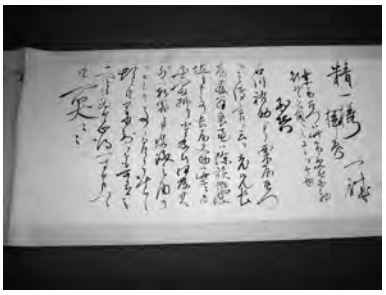
前原一誠からの書簡

NHK大河ドラマ『花燃ゆ』にも登場し、明治九年（一八七六）に起こった「萩の乱」の首謀者としても知られる、前参議前原一誠の直筆とされる書簡が下関市立長府博物館に残っています。

この書簡は、和智精一という人物に宛てたもので、かつては信頼する配下でしたが、「萩の乱」当時は県吏となっていた和智たちの身に危険が及ぶことを懸念し、急いでしたためたものと思われます。日付の記載はありませんが、封筒の表書きの記載などをもとに他の文献から推測すると、十月三十日から三十一日にかけてのものと思われます。萩市中で戦いが始まった三十一日の夕刻、前原は天皇に直訴するため、ひそかに一部の同志と共に船で島根県境の江崎に移動しており、多くの同志とは別の行動をとっていました。

書簡に書かれている処罰についての情報内容が、実際とは大きく異なっている（首謀者と幹部の範囲に限定）ことから、前原の得た情報が正しかったとは言えませんが、聞き知った情報をすぐに行動に結びつけているところや、かつての同志を気遣うところなどから、前原の人となりの一端を知ることができる貴重な史料の一つだと言えます。

（担当　岩瀬・淺川・古屋）



前原一誠直筆とされる書簡
（「前原一誠尺牘」下関市立長府博物館蔵）

精一様　　一誠
拝啓
石川祐助から粟屋左門への伝言では、長屋藤翁、（曽根）釆亮は除族懲役、長屋又助も不審（嫌疑）が掛かっている。小生及び伊藤その外は斬罪と決議された。オソロシキ事だ。頓にご承知と思うがお心得の為に一寸申し上げる。
御一笑〃〃

現代部会

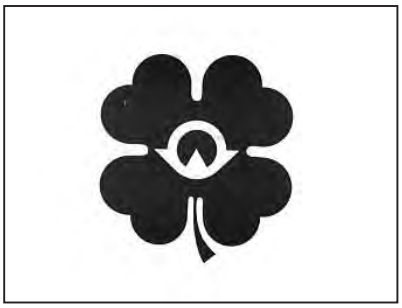
4つの「H」とクローバー

戦後、農林水産業から生活・教育に至る幅広い分野で積極的に展開された「農山漁村新生運動」は、他県に類を見ない山口県独自の活動の一つで、この運動を担ったのが、若い世代を中心に結成された「4Hクラブ」です。昭和二十七年（一九五二）二月時点で、県下に二二二のクラブがあり、会員数四三九八名を擁していました（『昭和二十六年度農村青少年クラブ年報』）。アメリカを起源とする活動は、プロジェクト（生産活動・文化活動）を設定し、「実践によって学ぶこと（learning by doing）」を基本とし、農業技術の普及や発展はもとより、生活や文化意識の向上にも大きな影響を与えています。

4つの「H」は、信条として掲げられた、HAND（手）、HEAD（頭脳）、HEART（心）、HEALTH（健康）の頭文字を取ったものです。ガートルード・L・ワレンの『4Hクラブ活動の組織』（一九四八）によると、「全米4Hクラブの標章は、四つ葉のクローバーの一枚々々の葉に、Hという文字を配したものであって、標色は緑と白である。」とあります。県内でも、アメリカから日本に伝わった4Hクラブの標章をもとに、図案化された山口県4Hクラブの標章を見つけることができます。

（担当　津枝・瀬崎・中野・河村）

「山口県4Hクラブ連絡協議会」のクラブ旗（昭和32年、山口県蔵）
中央に「山口」の文字が配されている。



上記のクラブ旗とは異なる図柄
『農村青少年クラブ（4Hクラブ）とはどんなクラブか』（山口県農村青少年クラブ連絡協議会）の表紙
中央に県章が配されている。時期は不明。

県史アラカルト　11

天花火薬製造所爆発事件

大内氏の菩提寺として知られる山口市大殿大路の龍福寺。ここに幕末維新期の歴史遺産があります。慶応三年（一八六七）三月十七日に火薬庫の爆発事故で犠牲になった人々の合葬墓が残されているのです。

「合薬調製場」と呼ばれる火薬製造所があったのは、萩往還に面する山口市天花（てんげ）の地です。一の坂川の水力を利用して器械を動かし、銃砲に用いる火薬原料を作っていました。「忠正・忠愛両公伝考証」（山口県文書館蔵）には、即死者の数とともに「此朝四ツ半時、山口一ノ坂口合薬調製場出火、九ツ時鎮火、水車等全部焼失」と記され、爆発のすさまじさを伝えています。彼らが龍福寺に葬られたことからは、ここに藩の出先機関があったこととの関係が推測されます。この頃、萩の洋学・医学の研究所だった好生堂が、山口の龍福寺境内に移されていたとの記録があるのです。

犠牲者の合葬墓（山口市龍福寺）

爆発事故による犠牲者

出身地	身分	名前	出身地	身分	名前
大島郡浮島江浦	百姓	佐次郎	山口上金古曽町	町人	半次郎
		忠助	山口下金古曽町	町人	助十郎
		虎蔵			嘉助
		亦吉			辰蔵
		新蔵	山口下立小路	町人	吉蔵
大島郡久賀村	百姓	藤助			熊吉
		伊助	山口宮野桜畠村	百姓	伊三郎
奥阿武郡福田村	百姓	亀蔵	山口黒川村	百姓	勝次郎

（「柏村日記」を参考に作成）

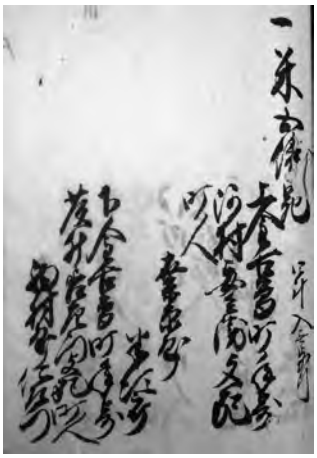
この事故の犠牲者は十六名で、藩主の側近が残した公務日記（「柏村日記」山口県文書館蔵）に記された犠牲者の出身地と名前は、表のとおりです。

この表を見ると、事故の悲惨さが胸に迫ってきます。犠牲者が「十六名」という単なる数字ではなく、「人」であるという当然のことを再認識させられるためでしょうか。また、山口地区だけでなく、大島郡や奥阿武郡からも働きに来ていること、身分を越えて農民も町人も製造に従事していることがわかります。さらに、四境戦争が止戦となった後も大がかりな火薬製造が続けられていたことからは、幕府の権威が地に堕ちていたことを間接的に読み取ることができます。

なお、事故のあった五日後の三月二十二日に施餓鬼（せがき）会が催されており、翌日、犠牲者の遺族には米五俵がそれぞれ支給されました。これは戦死者と同格とされた可能性があります。史料によると、続柄は「倅（せがれ）」とある者が三名、「次男」「三男」「弟」とある者がそれぞれ一名ずつあり、まだ所帯を持たない青年たち、あるいは子どもも含まれていたのかもしれません。（「御褒美控」・「諸記録綴込」山口県文書館蔵）帰らない息子の代わりに米五俵が軒下に届けられた父母の心境は、察するに余りあります。

この合葬墓は龍福寺墓地にひっそりと佇むだけです。案内表示などもありませんが、少しだけ背景を踏まえて眺めると、激動期のわが国には、それを支えた「人」の活躍があったことが伝わってきます。歴史はドラマや映画に描かれるような英雄史だけで語り尽くせるものではなく、こうした民衆を含む、個々人の営みの総体なのです。

（北林）



遺族には「米五俵宛」が支給された。

「倅」「次男」「三男」「弟」と記されている。犠牲者の名前が表とは違っており、当時の混乱ぶりがうかがわれる。

ふるさと山口・30

『龍馬伝』から

脚本家　福田　靖

二〇一〇年のＮＨＫ大河ドラマ『龍馬伝』の脚本を書きました。

幕末のお話ですから当然長州が舞台になる回が沢山あります。僕はこの機会に、亡くなった祖母がよく使っていた「のんた」という方言をドラマの中で使って全国区にしてやろうと目論みましたが、「それは周防の方言で、長州では使われていません」と言われ、あえなく諦めることに……。僕は自分の無知を恥じると同時に、「僕は自分は長州人だと思っていたけど、僕が生まれ育った周南市は実は長州とは言えないのか」と小さく愕然としました。

それでも、吉田松陰、桂小五郎、高杉晋作といった長州のヒーローたちが登場するシーンを書くときは、やはり力が入りました。『龍馬伝』を書くにあたって改めて勉強すると、あの時代にあって長州が他藩を置き去りにするほどの先進的な考えを持っていたことに驚かされました。そして独立の精神に富んでいたことを誇らしく思ったものです。

僕が『龍馬伝』の中で特に気に入っているシーンは、第六話「松陰はどこだ?」の回。黒船に乗り込もうとする松陰が、龍馬に言い放ちます。

「見ろ！（両手を広げ）僕には言い訳など何もないぞ！　どんな運命が待っちょろうと後悔せん。僕が今やるべきことは、黒船に乗り込んでアメリカに行くことじゃ！」

僕はこの台詞に長州人のチャレンジ精神、独立心を込めました。そして松陰役の生瀬勝久さんの熱演で素晴らしいシーンになりました。

大河ドラマを書いて以来、様々なところから講演依頼を受けるようになりました。今でも『龍馬伝』のことを聞きたいという方が沢山いらっしゃいます。そういうときは僕は、講演の中で「日本を変えた長州」をさりげなくアピールすることを忘れません。

地域に根ざす・31

大内文化探訪会

本会は中世の守護大名・大内氏の大内文化遺跡等の文献的研究及び現地探訪を行い、会員の生涯学習と親睦、健康増進を図ることを目的として昭和五十七年十二月に発足しました。

大内氏は、百済国聖明王の第三子、琳聖太子を始祖とし、聖徳太子の時代に周防の多々良浜に上陸、多々良氏と称して山口大内に居を定めた、との伝承があります。多々良氏の足跡は奈良時代に遡ることができ、周防国衙の官人であったと言われています。

その後、大内氏は、十四世紀末には、周防・長門・石見・豊前・和泉・紀伊の六国の守護となるなど勢力を広げ、応仁の乱では、西軍の有力武将として乱の終結のため大いに力を発揮しました。また、軍事面だけでなく文化面にも力を入れ、画聖雪舟を招き山水画を完成させるとともに、連歌師宗祇を招聘し「新撰菟玖波集」編さんに協力しました。

このように文武両道に優れて活躍した大内氏の足跡を訪ねて、山口県下はもとより中国地方、京都や和歌山まで探訪を行うとともに、一般市民を対象とした公開歴史講座を年間五回開催し、市民の啓蒙に努めています。これらの成果をまとめ会誌を年一回発刊しています。

本会は、研修部・探訪部・編集部・総務部の四部によって、各部長を中心に自主活動を行っています。今後、五十周年を目指して息の長い活動をしていきたいと願っています。

（会長　兼重　元）

連絡先　山口市湯田温泉三丁目七―三
電　話　〇八三―九二三―〇八八九

大内氏史跡のボランティア活動

県史刊行のお知らせ

今年度の配本予定巻についてお知らせします。

『通史編　近代』は、明治四年（一八七一）の廃藩置県から第二次世界大戦終結までの本県の近代史を、多様な歴史的要因に目配りしつつ、三方が海に開けているという地理的条件や、県内各地域の歴史的展開を踏まえ、幅広い視野から描き出します。

『史料編　現代5』は、第二次世界大戦の終戦を迎える昭和二十年（一九四五）から、昭和から平成へ移行する一九九〇年頃までの時期を対象とし、戦後日本の政治・社会の変遷の中で、山口県域の政治・行財政・社会・教育・文化・世相がどのような変貌を遂げてきたのかを明らかにする史料を収録します。

どうぞご期待ください。

こちら県史編さん室

十月十日、山口市の山口県教育会館を会場に、第二四回山口県史講演会を開催しました。

講師は、山口県史編さん専門委員の岸本覚先生（鳥取大学地域学部教授）で、「明治維新と宗教―転換期長州藩にみる寺社と祭祀―」と題して講演されました。

江戸時代末期における長州藩の宗教政策を切り口として、変容していく社会の有り様を、専門的見地から語られた講演内容は、大変興味深く、参加者からもご好評をいただきました。

第24回山口県史講演会開会のようす

山口県史の構成・刊行計画（全41巻）

【通史編】　6巻
- **原始・古代**
- **中　　世**
- 近　　世
- 幕末維新
- 近　　代
- 現　　代

【民俗編】　1巻
- **民　　俗**

【史料・資料編】　33巻
- **考古1（原始）**
- **考古2（古代以降）**
- **古代（古代史料）**
- **中世1（記録）**
- **中世2（県内文書1）**
- **中世3（県内文書2）**
- **中世4（県内文書3・県外文書・文学資料）**
- **近世1（政治1）**
- **近世2（政治2）**
- **近世3（経済1）**
- **近世4（経済2）**
- **近世5（文化）**
- **近世6（諸家文書1）**
- **近世7（諸家文書2）**
- **幕末維新1（政治・社会1）**
- **幕末維新2（政治・社会2）**
- **幕末維新3（政治・社会3）**
- **幕末維新4（政治・社会4）**
- **幕末維新5（経済）**
- **幕末維新6（軍事）**
- **幕末維新7（文化・海外史料）**
- **近代1（政治・社会・文化1）**
- **近代2（政治・社会・文化2）**
- **近代3（政治・社会・文化3）**
- **近代4（産業・経済1）**
- **近代5（産業・経済2）**
- **現代1（県民の証言　体験手記編）**
- **現代2（県民の証言　聞き取り編）**
- **現代3（言論・文化　プランゲ文庫）**
- **現代4（産業・経済）**
- 現代5（政治・社会）
- **民俗1（民俗誌再考）**
- **民俗2（暮らしと環境）**

【別　編】　1巻
- 年表

※　**太字**は既刊

山口県史だより　第32号

平成27年11月25日発行

編集・発行／山口県県史編さん室

〒753-8501　山口市滝町1番1号

TEL　083-933-4810

FAX　083-933-4869